



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	位相型アプローチによる生徒指導システム構築の臨床教育学的検討：特別な教育的ニーズのある生徒への自己理解支援の有効性(論文要旨)
Author(s)	三浦,巧也
Citation	
Issue Date	2014-03-14
URL	http://hdl.handle.net/2309/136190
Publisher	
Rights	

氏 名 : 三浦 巧也
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 227 号
学位授与年月日 : 平成 26 年 3 月 14 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 位相型アプローチによる生徒指導システム構築の臨床教育学的検討
— 特別な教育的ニーズのある生徒への自己理解支援の有効性 —
論文審査委員 : (主査) 教授 橋本 創一
(副査) 教授 朝倉 隆司 教授 保坂 亨
教授 尾崎 啓子 教授 林 安紀子

学位論文要旨

本博士論文は、臨床教育学的視点に依る校内支援体制のあり方を検討し、中学・高校に在籍する特別な教育的ニーズのある生徒の学校適応の向上を目指した生徒指導システムモデルを構築することを目的とした。

第 1 部では、校内支援体制や特別な教育的ニーズのある生徒の現況と生徒への効果的な支援のあり方について検討した (第 1 章～第 5 章)。次に、第 2 部として、得られた知見をもとに、特別な教育的ニーズのある生徒に対する教育実践の有効性について検討を行った (第 6 章～第 8 章)。最後に結論として本論の結果をまとめ、包括的な支援の一翼となり得る様々な側面からの支援を展開することが可能な位相型アプローチによる生徒指導システムのモデルの構築を試みた。

第 1 部の第 1・2 章では、多様なタイプの高等学校の教育的ニーズや支援体制のあり方について検討した。第 3 章では、不登校等を経験した中学卒業生 (高校生) の学校適応に関する実態を把握し、第 4・5 章では、中学生の学校適応の実態及び特別な教育的ニーズのタイプを探索した。

その結果、それぞれの学校のタイプに応じて支援ニーズや支援強度及びサポート要因は異なり、個々の学校の独自性を考慮した支援体制の構築が必要となることが示唆された。

また、支援のあり方として共通していたことは、特別な教育的ニーズのある生徒の特性については、教諭が早期に生徒理解の充実に努めることと、ニーズに応じた適切な支援、特に生徒の自己理解を促す教育実践が期待された。

加えて、教職員が生徒の実態を把握し、早期に支援を必要とする生徒に対して適切なサポートを行っていくためには、教諭が心理・発達面に関して専門性のある心理士と協働して、生徒への支援を行っていくことが重要であると推察された。

そこで、第 2 部の第 6～8 章では、特別な教育的ニーズのある生徒に対して、自己理解の促進による課題の軽減や改善を目的とした支援の有効性について検討を行った。特別な教育的ニーズのある生徒への支援では、認知行動療法 (以下、CBT) の手法を取り入れた支援を実施した。

支援に参加した生徒は、それぞれ自分自身の特性に関して、弱みや苦手を客観的に把握した後、新たな行動様式を身につけ、よりよく生活していくために強みとなる力を創造するに至り、

日常生活の困難さを改善させていった。

このことから、生徒の特別な教育的ニーズの改善や解決には、CBTの手法を生かした自己理解を促す支援を展開していくことが、生徒の学校適応を向上させる有効な手立てである可能性が推察された。

また、第2部では生徒の特別な教育的ニーズに対する支援について、教諭をはじめ保護者とSCや相談機関の心理士との協働による支援効果の検討を行った。教育実践の結果より、教諭とSCとの協働関係において重要となる援助特性を満たしていることが推測された。加えて、本論で用いたCBTの手法による支援プログラムは、実証性のあるデータを教諭に提示できるため、協働を深めていくためには効果的であることが示唆された。そして、心理・発達面の専門性を持つ心理士が、生徒に対する支援のつなぎ手として役割を発揮することで、生徒を取り巻く学校システムを有効に活用することが可能となり、結果として特別な教育的ニーズのある生徒の学校適応を推進することに繋がることが推察された。

さらに、特別な教育的ニーズのある生徒に対して、教諭と心理士が協働して教育実践を開始する際には、生徒理解を目的とした支援ニーズに関するアセスメントに加えて、土台となる教諭の意識と学校状況について、心理士がアセスメントしていくことにより、充実した支援体制の基礎を築くことになると推察された。

以上のことから、結論として生徒指導において、発達援助専門職である教諭と、心理・発達面に関する専門性のある心理士との協働を生かした、援助志向的な支援システムのモデルを構築した。

- ・フェーズ0：学校・教諭のアクションアセスメントモデル
- ・フェーズ1：生徒の実態・支援ニーズアセスメントモデル
- ・フェーズ2：特別な教育的ニーズに対する支援アプローチの選定モデル
- ・フェーズ3：特別な教育的ニーズに対する支援介入モデル
- ・フェーズ4：心理士の働きかけによる協働関係深化プロセスモデル
- ・フェーズ5：自己理解の深化・ニーズの改善プロセスモデル
- ・フェーズ6：学校適応の向上プロセスモデル
- ・フェーズ7：新たな支援ニーズの検討プロセスモデル

このように本研究では、臨床教育学的視点による教育実践や調査を通して位相型アプローチによる生徒指導システムを検討した結果、教諭らと発達援助専門職であるSC又は心理・発達面に関する専門性のある教諭が、個々の学校の特徴に合わせて、特別な教育的ニーズのある生徒の自己理解を促す教育実践に向けた新しい知見を提供したといえる。